

# 原

巻頭インタビュー

# 丈

アライアンス・フォーラム財団代表  
内閣府参与

# 人

考古学の発掘資金を  
稼ぐためにスタンフォードに

**渡邊** 原さんの提唱される「公益資本主義」の考え方には、共感するところが多く、ぜひ一度お話を伺いたいと思っていました。

**原** ではまず、どうして「公益資本主義」という考え方に至ったのか、そこからお話ししましょう。もともと私は考古学をやっていて、ビジネスには関心がありませんでした。ところが、エルサルバドル、グアテマラ、ホンジュラスで考古学の研究をしているうちに資金が底をつき、その資金を稼ぐために（ドイツの考古学者）シュリーマンのように発掘の資金を稼ごうと。でも、ビジネスはわからない。で、アメリカのビジネススクールに行けば、英語とビジネスの両方を学べると思ったので、スタンフォードに入りました。

それが1979年です。同級生に、のちにサン・マイクロシステムズを創業するスコット・マクネリとか、マイクロソフトのCEOになるステイブ・バルマーなどがいました。情報通信の分野の起業家たち、例えばケン・オルセンというデジタル・イクイップメント社の創業者や、タンデムコンピュータのジェームズ・レイビックという創業者が、毎週のように学校に話に来て、学生たちに会いにくる。本当に面白いところでした。

なおかつ私が考古学時代に、黄熱病とかマラリアの熱帯感染症の脅威、毒蛇とか毒トカゲといった環境の中にいたので、病気やケガをしたときに、破傷風などをどうやって治すのかなと、いつも考えていたわけです。そう思っているときに、元銀行員のロバート・スワンソンという人と、カリフォルニア大学教授のハーバート・ポイヤートという人が来て、これから遺伝子工学を使ってインシュリンを作ると。彼らはバイオ・ベンチャーのバイオニアであるジェネテックの創業者になる人です。そういう話をしてくれるので、私の好奇心を深めてくれることばかりがある学校でした。ビジネスはやる、考古学も継続してやる。さらにライフサイエンスの分野の遺伝子工学を勉強するにはバイオケミストリー（生化学）

「株主資本主義」から「公益資本主義」へ。  
日本はそのモデル国家となり、  
世界をリードすべきだ

聞き手●渡邊直樹 本誌編集長 写真●河野利彦

株主の利益を優先する英米国型の資本主義（＝株主資本主義）が、社会格差を広げ、モノづくり企業を弱体化させる――。欧米で多くのベンチャー企業育成を手掛けてきた原さんは、そのことを痛感し、儲けを出したうえで、企業を支える仲間（カンパニー）に広く公平に分配する「公益資本主義」を提唱し、世界に広げようとしている。

George Hara

1952年、大阪生まれ。  
慶應義塾大学法学部卒業後、27歳まで中米考古学の研究。  
その後、スタンフォード大学経営学大学院へ進む。  
同大学工学部大学院修了（工学修士）。在学中に  
光ファイバー事業を起業し成功。84年にベンチャー・キャピタルの  
デフタ・パートナーズを設立し、90年に、アクセル・パートナーズの共同経営者となる。  
現在はグループ会長。85年に途上国支援などを行う  
アライアンス・フォーラム財団設立。現在は代表。  
2013年より、内閣府参与。著書に『21世紀の国富論』、  
『「公益」資本主義』など。

アライアンス・フォーラム財団日本オフィスで。